

---

# コトシラとお姉さん

白紙描写

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コトシラとお姉さん

### 【Nコード】

N9554Z

### 【作者名】

白紙描写

### 【あらすじ】

『殺人しましょ。』で、主人公コトシラが実のお姉さんとただただ単に、人を殺してく残虐エピソードです。手始めに弟から殺しましょ。

「真剣な話、一度でいいから、人を殺してみたい物です。姉さん！」

目の前には、おれの姉がいる。

おれは、誰でしょう？おれはコトシラです。

おれは、無断で姉の部屋のドアをこじ開けて、中に入り、絵を描いている姉に話しかけた。

「？なんの話を持ち込んできたのかしら？不思議極まりないわよ？コトシラ。」

おれは、姉さんにしか、相談できないと踏んで、実の姉に…話を持ちかけているのだ。

おれは、人が嫌いです。  
でも、姉は大好きです。

その名の通り、相談できる唯一の頼みは、お姉さんしかいないのです。わがままですけども。

「おれ、どうしてもやらないとうけない。相手がいるんです。どうか、頼みます。姉」

深刻な悩みです。普通人を殺めるなんて、行為が許される世界ではないとわかっています。理解しています。けど、どうしても、どうしても…殺したい相手があります。しかも複数。

「なにをやるのかしら？まず、そこから説明捨ててくれる？」

真剣に、訊いてくれるようだ…本当に助かる。親切で優しいお姉ちゃんだ。

## 1 (後書き)

すぐ更新します

「とりあえず、誰からぶつ殺しましょうか？」

最初からその言葉を振って、おれに戸惑いと躊躇を与えるように持ち出した言葉に見えた。

「そんな潔くていいんですか？もう少し、焦らし揺さぶってくださいよ。…殺人は駄目だと」

野獣と人が敵対し、共同するこの世界。少なくとも、他殺はよくあるこの世界である。

そこには、おれらの町があって、村があって、家があって、そして、ここが姉の部屋だ。

姉は、絵を描くのが好きらしい。そこら辺、部屋一帯は絵と紙だらけだ。何の絵を描いてるかだって？

それは言えない。

言う必要がないからだ。

正座しています。

「あらあら、その言い様は何なのかしら？…弱気とか、そう言うのは止めて欲しいのだけれど、」

と言うけど、正直の所は、もろに本気です。それ以外の面持ちでは言い出せませんですよ。

「止めます。と言うよりは、初めから本気です。そりゃもう、全力です。」

「いい心がけね。」

誉められるほどでもない。

あ、誉めてはいないのか。

「心がけはいけません。信念です。ム力つく奴は、土に埋めるのが正しいと信じてます。我が地方の名残ですよ。」

「そのような名残が有るのなら、私も土に埋まっています。」

恨みを買われたこと有るのかな？

…そうか、なる程、それが怖くて、毎日家に部屋に引きこもって、なんやなにやらを創作していたのか。

頷ける理由。

「怖くて、外に出れないんですか？姉」

唐突にも、適当に話しを持ちかけた。

「現実逃避がしたいの」

すぐ答えてくれた。

「現実逃避って何ですか？感じが難しいです。」

おれの実年齢は、11歳で小学生五年生と言ったところです。

けども、この世界に学校なんてないし、プールの授業なんて物もありません。

付近の湖が海だと思っていました。

でも、お父さんから聞いた話だと東北四百キロに海存在するとしりました。

人間知らない物は、概念から知らないようです。

「この世界の否定です。」

「まるまる否定するんですか!？」

「いえ、分かりやすく纏めただけです。あなたは、小学生だから分からなくてもいいのよ? コトシラ」

小学生ではない!

小規模機関第二百五機関中立機関だ。

この王国の国立機関学校の直属直轄生徒だ。

嘘です。狩人の卵です。

「分かってみたいです。姉!」

「好奇心は狂気よ。それでもいいの? 後戻りは出来ないわよ?」

姉が凄い形相でこっちを見るので、そっぽを向けた。

悪魔と天使は、いったい何がしたいのか? 神の基準は信者の数で決まるのか?



そう言った疑問の深みにはまったような…相違や矛盾を会わせようと頑張る哲学者のように、

「何を考えてるの？ 以外と怖いわよ。コトシラ。…小学生らしい表情をしなさい。」

「殺人を犯す話を持ちかけた時点で、小学生の表情なんて出来ません。訝しげで険しい表情と言ってください。」

「言いたくないわ」

その拒否を発動した顔を見ていると殴りたくなってくるけど、年の差と暗黙の格差で何も出来やしない。

それにしても、ペンキや絵の具のにおいがひどいな。ミネラルウォーターで筆を洗うところが姉さんらしい。

ゴミ箱の内側の内蔵がペットボトルの墓場になってたし、

ここからは確認とれないけど、多分そうなってる。

「一つ、話が脱線していようで、していないのだけれども、そもそも、どうして、そこまで人を葬りたいの？」

安易に直接的なことを言う姉。

部屋の温度が一気に下がる、それはあたかも、何かに縛りを利かした蛙のように、

「それ、言ってる言いの？姉さん」

「言っても言いけど、さっきみたいに地方がどうのこうのと言う寝

言はなしでお願いします、わ」

「わかった…」

息を飲む、ここで笑いを取ってしまったら、おれが誰かに殺される。笑いすら取れないけども。

空気をのむ、おれの信念、ム力つくだけでは説明不足。本当の正真正銘の真理を言う。てか吐き出す。

怒りや恨みだけじゃない、もっと大きな理由。

それは

「自分が嫌いだからです。」

「？ よく聞き取れませんでした、もう一度言ってくれろ？」

姉は椅子に座り、こちらを見下すようにしているため、言う通りにする。

「自分が嫌いで、自分は人で、だから、人が嫌いです」

ずっと自分に愛想尽かしてた、俺だけじゃあな筈、日本人なら殆どそう思ってる。

俺たちは日本語を喋る異世界人だが、きっと日本語を言える人は、考え方も微々に似てると信じたい。その案だ。

「それは、人が嫌いだから自分が嫌いと言っているの？」

逆転の発想は、哲学者とかがよく駆使する類だ。

同じことを言ってるだけだけど、

「全部嫌いです。そこまで言いますか？ 言いますよ」

「可愛い脳味噌してるのね。弟として、ここまで完成された稚拙な思考を持っている弟は初めてよ。嬉しいわ…お父さんに感謝しようかしら。」

おれを生んでくれた母と父に両方に感謝してよ。

なんで、父さんだけなんだ？

深く考えないことにした。

「おれは嬉しくない、けど、楽しいし面白いではある。この世の生まれてきて…」

「あなた、神経どうかしてる…あ、人を殺めようとしている人に、正常な人はいませんね。」

「姉さんも引きこもっているだけですし、何をやっているか？と聞けば、紙一面に、豆腐の絵や牛乳だけの絵を描くだけですし、人として歪んです。」

ついに、言ってしまいました、禁句とされる一言を…

恐らく、この言葉に姉はこっぴどいおれを下界の地獄に馳せらせだろつ。

「人がいなくならないと、平常心を保てない？コトシラ」

人が今より少なければ、より良かったかも人間関係的にけど、この世界も人が多すぎる…

あ、悟った。

なる程、おれは人が嫌いな訳ではなくて、人によっていただけなのか…

「気づきました！姉！俺は、人に酔っていいだけです！すごいです姉」

気づいてみれば、簡単なことでした。人の居ないところへ行けばいい話だったのです。

「…それで？ あなたの今の意志は…何？かしら」

頬杖ついて、纏めてくくつて、訊いてきた。

勿論答えは、

「人を減らせばいいんです。何処かへ逃げるなんて出来ません…手始めに、弟から行きましょう。」

訂正はしない、決意表明をしたにすぎない。

「あはは、やっぱりそっちに繋がるのね。面白いわ。なら決まりよ。私も協力してみるわ」

「是非お願いします。」

なんだか、意味がおかしいけど、成り行きって奴に任せます。だって、結果が欲しいし、嫌いな物は嫌いだから、

姉は、椅子から立ち上がり、筆立てを盛大にぶちまけた。



「散らかりました。誰の仕業かしら？　ね？　コトシラ」

「おれが言えるのは、姉自身がわざと蹴り飛ばしたと見受けられますので、姉の自業自得です。」

お茶目にどじをした…とは言えませんが。だって、大切すぎるほどの存在である姉さんを体の低い個性の位置づけをするのは、おれだけの判断ではまかなえません。

おれは、誰よりも姉だけは認めます。  
従います。頼みます。

「そうね。私がすべて悪かったのね。なら、私は筆以下の存在で良いわ」

位を下げたのか？

意味が分からない。…おれをあざけ笑っているとか、か？

おれの中には、姉しかいないから、姉はおれを弄んでいるというのか？

位を下げるというのなら、おれも下げないと…

止めた。そうなら、そうであるのなら、おれが姉を虐げることだつて出来るじゃないか。

「そこからの結論だと、姉さんは、俺の道具つてことになりますよ？　それでもいいの？　いじりますよ？」

おれはバカみたいなことをいつてみる。

この言葉に『扱う』の意味が込められてはあるけど、協力してくれるのは姉さんの方だ。下手に出るのが当然なのに、弟なのに、ここまで自分勝手な言葉は、生まれて初めてだ。

いや、もう口にしたから、生まれて初めてだと訂正すべきだな。

「馬鹿なのは私の方です。あなたの方がずっと優れてますよ？ コトシラ。」

言ってくれましたね。とどめです。

姉さん本人は、計画案立ったのか、偶然の口だったのかは、皆目見当もつかない。

けれど、心を読んでいとしか思えない。言動。

心の内を覗き込む、人心読解力。

偶々と言うことにしよう。

「おれは優れてはいませんが、恐れ入りますが…ね？」

床に転がる筆を手にしたコトシラ。

この行動に意味はないけど、コトシラは何となくで手にしてみた。

「あらあら、自分の価値を低く受け取るのね。…なら、『よくできている』って言うのはどう？ 文学的ではないかしら？」

良くできているとは、何だろう？

そして、何故そのように、そのような言葉がほいほい出てくるのでしょうか？

おれは、文学よりも数字の方が好きだけどね。

「一つとしていつてみては、おれがよくできているとは何ですか？」

難解授業の答えよりも気になる…言葉回し。

一言言つて、おれの方が教わる側で教える側ではないことは、いつも通り知っている。なので、

人の話を聞くときだけは、凄いですよ。

人間メモ帳です。自称するくらい自身があります。

「その質問を今、答える必然性はないわ。…あなたがそれを認めるか、認めないかを私は知りたいの。」

何を理由にしてそうなったの？

あ、おれの価値観についてか。なら、答えは一つだけ。

「認めません。おれは良くできていないから。それと、狂っているから…」

そう、自分のそのままの言葉だ。

おれは狂っている…人で居てはいけない。と言うことで、人を殺めます。

減らします。

そこが、よくできているの…

「ん、何か、叫びましたか？」

「何も言っていないわよ。あなたは殺人的だと言っただけよ。」

「言ってるではありませんか」



「そこは保留します。と、時間がもつたいなく感じてきましたから、今から始めようかしら？」

訊かれなくとも、おれは筆を片時も離さず、正座から直立しています。

もう今からでも、やれますよ？ 筆で…

「見てごらんのように、もう準備は整っています。やりましょう。姉」

「いい行動力ね、見込み通りよ。でも、筆だけでは、眼球くらいしか潰せないんじゃない？」

物理的に、力のある人でも、簡単に人を殺せますが…生憎、持ち合わせている人物は、子供と女性、…どう見てもやられる側の人材である。

「そう言われなくとも、筆で肉を貫くのは困難でしょうし、皮すら外壁ですよ。」

筆の強度と鋭さを軽く見積もっても、あの弟を殺すことは不可能です。

弟は言ってしまったえば、俺より強い。

あ、でも、筋肉とかで、攻守を増強しているわけではないです。

単に、狩人の血が強く、頭もキレています。

オールトータルに、万能な人と言いましよう。

それが敵。外敵です。

「嫉妬心だけで、筆を用いて殺すのもやぶさか不満でしょうし、攻

撃力不足です。あなたが、どれほど、力があっても弟には勝てませんよ?」

言い回しが解読できない。

つまり要するに、筆と腕力を増大させても尚、弟には勝てないということを良いついのだろう。

…

…ぶ、当たり前の言葉ですよ。

筆で人を殺せたら、書道界に衝撃と衝動が揺らぐこと間違いなしですね。

「小難しい言語ありがとうございます」

「いえいえ、どう致しまして…あ、良い物がありましたわよ? これはどう?」

これはどう?と蟠るおれに、差し出されたのは、コンパスでした。

「コンパスですか? 考え物ですね。…確かに、筆とは数段階上等の製品ですけど、人を殺すほどの殺傷力があるとは思えません。あと…」

あ、いや、ここは全然言える立場ではない。これは言うべきではない。

コトシラは、言葉後半言いかけた言葉の意味を理解して、口を閉じた。

「あと? 何か、言いたそうだけど、…何なら、言ってくるれかしら

？ 気になります。」

気にしないでください、気に障りますから、自分に対して…

「言えません。これは使えますよ。姉」

すぐさま、話を切り替えたが、流石すぎる姉はそれ以上は詮索しなかった。

「どこが使えるの？ 只の文房具じゃない。それとも、最近文房具で人を殺めるのが流行りなのかしら？」

話を合わせてくれる気配は無し。正直の意見でしょう。  
あきらめていましたが、やはり、文房具は質の悪い狂気にもならないらしい。

「文房具類は諦めました。」

素直に言ってしまうえば、それでおしまいのことだった。  
時間が勿体なかっただけでした。

「それでいいのよ。なんなら、王道に任せて、包丁はどうかしら？  
日本の拳銃よりも殺傷力高いわよ？ それに、すぐに手に入られる。」

王道が一番安全で、成功率も高いと訊かれる。おれはそれさえも、背きたい。

「包丁は、返り血が付着します。王道な理由で片付けます。洗濯が大変です。」

「捻りが欲しい。こんな物でも、息耐えるのか！って奴。」

「サランラップ」

「笑ってしまいます。」

「水槽の角」

「水槽がないです。」

「事故死」

「運命は変えられない物だと思います」

「ネタ切れね。」

「少なすぎる持ちネタだった。」

「笑い殺しとか、無理ですねよ？」

「姉さんが殴って殺してください。」

「本気にはしてなかったけど、何となく、言ってみたくなった。」

「私の体を見て、そう言ってるの？」

「体育会系ではないのは明らかだった。」

「言っなければ、貧弱そう。」

「意外性ですよ。そんな魔法でも持っているのかな？と思って……」

「みる世界を間違ってるわよ？ 魔法なんて使えないけど、そんな系、合ったじゃない？」

どさくさに話がよからぬ方向に直進する。

「科学ですか？ そんな回りくどいことは嫌いです。…もう、椅子で良いです。姉さん椅子借りますね？」

呆れて、そうすることにしました。

「あら、そう…」

「今日は、親が留守ですから、丁度良いところに杓文字が有るって所ね。」

台所へ向かったと思えば、馬鹿な考えを実行する。態と言つのはもう間違いらしい。

計算してるとも、思えなくなってしまうそう。真性とも認めたくない。

これは誘導人証しているに違いない。

ややこしくなってきたから、考えるのはよそう。

「杓文字では、蒲鉾を切断するのがやっとだと思いますが、…しかも、すっごい切れ味の悪さで…本当に出来ますか？」

訊いてみる、おれの左手には姉の座つた木星の椅子。

歩く度に、床とスリ引きずる音がする。気にしない方がいいのか、静かな二階建て一般住宅に、鳴り響く。

それと、ここまで語るところも語りたい。…姉の部屋から階段を降りる際、騒音がとてもじゃないけど、五月蠅かったです。

姉に『片手引きするのは止めなさい。』と優しく怒られたが、おれに、そのような言葉を今更、言う方がおかしい。

おれは、人間として終わっているの…

「叩いてなぶり殺すのなら、可愛いと思わない？ その理由です。」

「可愛いさの問題ですか、別に、可愛く無くても良いし、姉に、杓文字は似合いません。…姉は、そうですね。釣り針が似合います。」

決るようで地味な道具、魚類なら『し』の字の悪魔。文字通り、『死』を意味しています。

これまた難題で、どう利用して人を亡き者にするのか？ が一番の課題。

まあ、釣り針なんて、買ってくるの面倒だから、語らいで終わらせますけど。

「釣りは好きではないの、私。言うのなら、泳ぐのが好き…かもね。」

昔は湖で泳いでいたとか、今は知りませんが、よく泳いでいたので好きになる…とは、あり得るかも知れませんね。

「おれは、泳ぐのは苦手です。泳いだあと、風邪をひいたり…何てことよくありましたし、」

「それは知ってますよ。コトシラ、あなたはよく、風邪をひいていました、弟と違って、病弱だから…よくよく看病したりしていましたわ。」

お母さんより、お世話さんだ。

おれには、そうされた記憶がないのは、何かの陰謀かも知れないな。

ガジャ

ギギ

椅子が引きずれる。

「とりあえずだ。姉、その凶器で本当に、いいのか？」

確認、今の時間の進行具合だと、もう時間切れだから…杓文字でいい。

杓文字が人をホフる程の殺傷力が無くとも、姉事だから上手く使ってくれるはず。

絵を描くのは、空間を掴むって事だ。

人間の構造も、絵を描写するのと同じ要領で、把握し、ピンポイントで突くことだって出来る筈。

物は試しだ。

杓文字で死ぬ人間も見てみたいしな。

「あら？ 少し前まで、否定や拒否を行使していた、にも関わらず、今度は肯定ですか。心がコロコロ変わるのね。コトシラ」

コロコロ変わるのは、場面と時間系列だろ？ それに合わせて、人が動いているようなもんだ、大きくは言えないけども。

「時間がないんだよ。そろそろ、弟が帰ってくる時間だろ？」

4時56分。五時丁度に帰ってくる訳ないし、もしかしたら、今来るかもしれない。

心の準備も必要で、殺す準備も重要。

…トリックや殺人装置を配備するわけではないけど、玄関付近で待ち伏せして、律儀な弟が靴を靴箱に、収納する背後を狙うのだけど、



兎に角、ゆとりの時間は合った方がいい。  
その案だ。

「かしこまりました、じゃあ私は、夕飯前のおやつでも作っておくわ。弟が来たら呼びに着てね、すぐさま、トドメを刺しますから…」

「うん、心強いよ。」

…  
コトシラとコトシラの姉は、自分達の持ち場につき、弟が帰宅するのをまちまちと待った。

一方、その頃より少し前の弟と言えば、  
草木が生い茂る、村のはずれの狩り場で化け物を狩猟していた。

ブギヤシャリ

「二十三頭目ですね。あと、一匹で三の倍数になって、歯切れがいいと思いましたが、残念。時間切れです。」

いつもながらにして、10分後行動を心がけている、コトシラの弟は、今日も歯切れが悪い狩猟数で用事を終える事になりました。

週に三回の炎狩猟部の部活は、とてもきつく生半可な気持ちの持ち方では到底、続けることが出来ません。  
継続は、大切だと弟は心がけています。

その甲斐あつてか、近所で噂の天才児と発展している様子です。

部活動のメンバーは六人です。

ここでは、メンバーの名前は伏せておきましょう。

「おー、コトヤ。今日も前にまして、歯切れの悪い数値を叩き出すじゃないか。…しってつか？ 二十三は、素数なんだぜ。」

と、コトヤの所属する炎狩獵部の副部長、が清々しく話しかけてきた。

「馬鹿にしているの？ 僕は、そこまで狙った数値は出せないし、自己ベストも、更新しちゃいないよ。そもそも平均値と同じくらいだし。」

一般人は、七時間に、十三頭くらいが妥当なところだが、コトヤと言う者、およそ半の三時間半くらいで二十三頭討伐してしまうのだから、言葉って言うている以上、凄いことなのである。

他の部員に比べると、やや、慎重すぎる面が有りはするがそれでも尚、結果と成果は上位副部長と互角の格差だ。

誰も文句を言わない実績と言える。

「はっ、均衡を重視するおまえの台詞は、俺からしてみればクソ喰らえだ。…俺なんて、19匹ぞ?!、お前と2の倍数差で負けているだ。文句の方が先に出了がるからやってられない。」

副部長は、結構飽きやすい性格してるから、途中半ばで、立ち昼寝とか、立ちうたた寝とか、闘いながら寝る事だっけしていた。

この人も、十分、人から文句を言われる闘い方しているよ。

「文句は言ってもかまわないけど、僕はそれよりも、副部長さんの顔の傷がおぞましいです。」

一昨日の部活の話し。

副部長さんは、いつも道理熱心に、狩りをやっていたのだけれど、突然現れた一級化け物に意表を突かれ、顔の深々と傷を負ったのだ。

顔が横にスライスされたようです。

きれいに、出来た顔の地平線が思いのほか、おぞましく映ります。

元々顔つきの悪かった副部長さんですが、その件で一段階、飛びつきりのある顔力を誇るようになりました。

「うい？ 何か文句でもあるのか？ 悪いけど、もう俺は文句を言えない立場になってしまったらしいんだよ。」

「え！？ と言うことですか？」

いつも僕だけに文句を言ってくれる、副部長さんが今回に限って、文句を言わないなんておかしい。

顔つきがおかしくなったから、頭も可笑しくなったと言う理論を、誰かが証明してくれたら、僕も潔く、躊躇い無く認めるけど…

本当に、こういう事でしょう？

「おい、「コトヤ」

なぜ、理解できない内に、僕の肩を叩く副部長さん。

何でしょうね、この感じ、しんみりしますよ。全く、次の言葉に、驚かされた。

「お前が今日から、副部長だ。今日から、俺の名は、稲荷口と呼んでくれ…」

イナリグチ。

初めて、副部長さんの名前を聞いた気がした。

何時だって、副部長さんは、『俺の名を呼ぶな！ おれは、副部長さんだぞ！』怒っていましたからね。

「イナリグチでいいんですか？」

飲み込みの早い僕は、再度、確認した。

「よお、副部長さん。」

そう言ってくれるイナリグチ。

僕の名前を差し引いて、副部長さんとは、つくづく、僕も成り上がったものだ。

「そんな事言わないでくださいよ。半分、本気にしちゃいますではありませんか。」

僕はそういう、何、なんて事ないよ。

僕は僕自身の力を知っている。

副部長だなんて、柄でも器でもない。

僕はただの普通の人です。

「本当の事を言っているだけ。ほら、思い出して見るよ。この傷を……」

イナリグチは、自分の顔の傷をなぞる。

痛くないのか、綺麗に沿っているのか、何ともない表情を見せる。

「昨日の大怪我だったのに、ここまで回復するイナリグチさんはやっぱり、ただ者じゃない。」

僕はそう確信付けるしかなかった。なぜなら、僕にとってのイナリグチさんは、副部長さんだからだ。副部長は何時だって、強い人やタフな人何だから……

「この傷の事で、部長に愛想尽かされちゃったりしてしまったんだ。…そして、その結果、俺は副部長を下ろされる羽目になったんだとさ。候補にお前が配属される。」

嘘みたいな話ではある、あの頑固で堅い部長さんが、僕を選ぶなんて…いえ、それ以前に元副部長のイナリグチを下ろす事自体、不自然だ。

嘘だと言いつけることは出来るとして、嘘じゃなかったときは、イナリグチさんを疑うことになる。  
ややこしい限りだ。

「それは本当ですか？ 僕は信じますよ？」

「信じさせる義理はない。な？ 副部長」

僕を見て副部長と呼んだ。これは決心付けさせる言い方なのか？  
そうであろう。

「じゃあ信じます。…あ、そうだ。僕、これから、五時までに家に帰らないといけないんだ。だから手伝ってくれるかな？ 獣の死骸集め…」

僕が部員を操る事なんて出来るのか、確かめるための指示だ。  
別に、従ってくれるとは思っていない。  
従わなければ、それまでだったと言える。

「分かりましたぜ、副部長」

とイナリグチさんは、僕の話聞き、素直に従いました。

僕は身を疑い。一瞬思考停止し棒立ち状態で佇んでしまいました。辺りは、肉片と血肉の海です。

無論、それらの破損物は全て獣の物です。決して、人のものではありません。

それを踏まえても、この光景は異常。血や肉を目に移すのが苦手な人や免疫のない人はみない方が思われるほどの残虐で酷たらしい光景。

異常な光景でも僕たちにとっては、いつの通りの景色。

慣れれば、それまで…でも、僕は初めから慣れていました。

その理由はおそらく、遺伝だと思う。大抵の人は、皆、こんな景色ばかりしか見ていない。

だから、遺伝子から慣れていましたのだと思う。

いきりためですからね。獣殺しは、

：

掃除をするとは、この臓物から脊髄までを綺麗に片づけること。

その際、使う道具とは何だろうか？ 決まっています。箒です。

箒でこまめに、生ゴミは集めて、袋に詰めるのです。単純過ぎますが、これは掃除であって、アイデアを駆使する場面でもありません。

綺麗に元に、戻すだけですから…

「副部長、集めましたよ。」

イナリグチさん意外にも、部員はいて、さっきまで空気のように関

わっていないかったがここで一人登場しました。

処理班担当のマカルとカイロです。

マカルは女の子で、美しい人柄。

カイロは男の子で、親切な人柄。

どちらとも、死に対して、全くの恐怖を抱かない。心の死んだ人たちです。

可哀想な人たちです。

家柄が響いて、死ぬまで闘うように産まれたときから、色んな事をやらされてたようです。僕には理解できません。

どうして、死んだ人間を造りたいのかを…

「あゝ、マカルか、すまないがおれは副部長ではない。今日からあいつが副部長だ。分かったか？」

イナリグチは、僕の立っている方向に指を向けた。立っている場所に出はなく、僕に対してだ。

「分かりましたよ。」

必ず、尾語に『よ』を付けるのは、彼女なりの個性の出し方なのであるうか？

気にしても、気にかけても、あの二人は死んでいるので興味が無いが、一応、個性として受け入れよう。

カイロは、独りで会場の草をむしっている。滅多に喋らないのが、



彼の個性と思う。

部活は、部活の為に用意された試合会場が設けられている。基本ただの空き地に、フェンスで囲ったような安い造りになっている。

土は栄養分が不足して、砂に近い。でも、雑草だけはのびのびと育つ。矛盾しているとも思うし、嫌がらせにも思う。

まあ、雑草にどんな感性を抱いても、

どう思っても、カイロが引っこ抜くだけだから気にしてはいない。

フェンスに囲まれた空き地の中央には、穴が存在していて、そこから、化け物達が湧いて出てくるシステムになっている。

餌は化け物をおびき寄せるフェロモンのような物で、穴は、森に繋がっている。

と

どうのこうの言っているけど、結局は、暇つぶしの地方が用意した遊具なのですよ。

「副部長、このゴミは、ドコに運べば、いいのよ」

持ち運ばれたのは、化け物が持ち込んできたのであろう、ビデオデッキである。

どうしようもない、普通のゴミだったのでコトヤは悩んだが…

「燃えないゴミと書かれた紙が貼られたアルミ箱に、捨ててきてくれればよいかと…」

これが副部長、初めての仕事だった。

「分かりましたよ。」

テクテクと、小走りでどこかへ消えてしまったマカル。

大丈夫だろうか？ 今日は燃えるゴミの日じゃなかったし、とうにゴミ収集車は今日の仕事を終えてるし、と不安をつのらせるが…とうにかなるだろうと、随分適当に決めつけたコトヤがそこにいた。

ふと

「おい、みんな集合しやがれ、今の職場もすぐさま放棄しやがれ、さっさと来い！」

若干、怒鳴りつけるような大声で収集を促すのは、頑固で奇天烈の部長だった。

僕も、副部長気取りを止めて、会長の所へそそくさと、向かった。

「よし、皆、集合したようだな。俺自身は嬉しいぞ。よしよし、みんないい子だ。死んで良い人間なんて、この世にはいない。」

とんでもないことを言うのは、会長の癖だ。大袈裟と言わざるを得ないお人だ

僕はこんな人は嫌いですから、気にもとめていない。

「みんなの本日の成績発表とする。成績発表を言ってから、もう一度、作業に取りかかってくれ、後は自由解散だ。理解したか！」

ただのうるさい人でもある。こんな人が部長だなんて、幸せ者ですね。恵まれてる人ですね。

「では、出だしの一発から、一位を発表したいと思います！」

テンションだけ高い上、発表とか言ってる。一番、早死にしそうな人一位ですね…この人は。

「52頭で、ダントツ一位のタカキ！です。」

僕の数の二倍はありますね。仕方ないけど、才能には勝てない。超えられない上、タカキ。

武器がS字フックのみで、戦う…僕の目で今までみた中で一番の狩人。

ここまで徳化された人には、僕はなりたくない。

「そして、二位はこの俺自身です！」

そうですね。期待道理でした。期待を裏切ってくれないのが部長と言つのも知っている。

副部長となつてなおさら気づく。特性。

「次に、コトシラ弟！頑張りましたね。今日からその努力を認めて、副部長です！パチパチ」

そうですね。嬉しくありませんけど、イナリグチさんが認めるのな

ら嬉しいで  
す。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9554z/>

---

コトシラとお姉さん

2011年12月31日23時46分発行